

## 2023年夏合宿 大雪山系

深見英太郎

前日談 自分を含めた幹部の数名から距離を歩いてアルプス系とはまた違った山を挑戦してみたい！という発言から始まった大雪縦走合宿、調べていけばいくほど交通の便やエキノコックス等々慣れない課題が多く見付き計画にとっても苦勞した。集合1つとっても大学生の給料では痛い出費であり時間や場所そこからの移動に難儀することとなった。

結果としてはOD缶やクマ撃退スプレーなどは現地のモンベルにて購入しことを済ませることとなった。そして、東京ではウェアなどの基本的な装備に加えてエキノコックス対策のろ過機を購入することのみとした。

1日目9月11日(旭岳ビジターセンター発白雲岳避難小屋着)

4時半、ヘッドライトは必要だが空は少し明るいくらいの時間に自然と目が覚め心地よい目覚めとなった。仲間も皆4時半起床をスムーズにできておりこれから数日間共にする仲間として安心した。前日に食べたピザの残りやスープやパンなどを各自で食べ、川嶋が個人で買っていたオレンジジュースの皆で飲んだ。味の濃い食べ物も甘いジュースもしばしお別れかとおもったが都会の生活習慣を見直し改める良い機会と感じたうえ目前に迫る旭岳の絶景のおかげで惜しさは全くなかった。どうやら同駐車場で車中泊していた人たちも旭岳アタックの面々だったようで5時30を過ぎるとエンジンをロープウェイのあるビジターセンターまで向かうためエンジンに火を入れる車がちらほらといた。僕たちもその中に紛れビジターセンターへ向かった。ロープウェイの乗車券を買い、いざ乗車した。同じロープウェイに乗っていた登山家の方と少々大雪の話をしていたらすぐに姿見駅に到着した。そこには麓でも壮大に見えた旭岳がより大きく見えた。各々、ベルトを締めなおしコンパスとGPSで読図を行ったら深見→川嶋→島田→浅川の順で隊列を組み出発した。旭岳の登りは植生がほとんどなく太陽が照り付けておりとても暑く、北海道とは思えないほど汗をかいた。しかし、風は心地よく皆とても良いペースで登っていた。一日目ということもあり食糧を多く積載しておりザックがなかなかヘビーだった川嶋にペースを合わせながらところどころ休憩しながら進んだ。十勝のほうからドンドン！と大きな音がしており雷を恐れていたが近くにいた登山者が自衛隊の訓練だと言っており安心した。その後も計画書通りに進み9時30には旭岳に登頂した。体感温度が高かったことや勾配が急だったこともあり、皆心拍が高く発汗量もおおかった。しかし、笑顔といつもの元気は全く消えておらず楽しそうにしていた。少し休憩し出発するととても急な下り坂が待っており滑りやすい地面も相まってとても苦勞した。途中島田が何度か尻もちをついていたが誰も怪我無くスムーズに降りることができた。ここから間宮岳まで昼飯以外ではほぼ休憩なしで歩いたが12時を過ぎたあたりから、ガスがではじめ寒く、半そでではいられないほどとなった。また先ほども言った通りコケ以外の植生がほぼないため風も強く肌に染みた。ここから間宮岳、松田岳、北海岳、白雲岳と通過したのだがガスがひどかった上、ほぼ平

坦だったのでただただ長かったとしか言いようがない。歩いて歩いて景色が変わらずそれでも楽しそうにしていた4人は生粋の山好きなんだろうなと思いながら歩いた。少しずつ大きな岩が増えてきて歩きづらくなってきたところでウサギが目の前を歩いており登山中初めて見た動物だったこともあり少し興奮した。気づいたら白雲岳分岐に到着しており宿泊予定地の避難小屋まで目前と迫っていた。そしてすこし下ったところにとてもきれいな二階建ての避難小屋が見えた。この日は、非常に風が強くテントを張る余裕がなかった上に他の利用客がほとんどいなかったため避難小屋の中を利用させてもらった。小屋の管理人の方にクマが最近よく出るという話とすべての水場が枯れかけていると聞き心配になりながら水を汲み入った。話に聞いた通り、水はチョロチョロほどではないが枯れかけており組むのに難儀した。そこからすべての水をろ過し夕食の支度と装備点検、次の日の読図を行い8時前には寝袋に入った。初日にして13キロほど歩いたので皆すんなりと寝ていた。

## 2日目9月12日（白雲岳避難小屋発ヒサゴ沼避難小屋着）

この日からこの登山の過酷さを思い知ることとなる。

前日同様4時30起床したら小屋の窓からビュオオオオという音とザーっという雨の音が混じって聞こえ嫌な予感がした。そっと扉を開けると10m先の視界も怪しいほどのガスと雨だった。そんな中、前日のパスタとスープを食べて各々したくを終えたら雨が弱くなるタイミングを見計らって出発した。隊列は前日同様だ。少し歩いていると天気も良くなり視界も晴れそこには日本とは思えない絶景が広がっており皆、興奮と驚愕を隠せずにはいられなかった。当然、僕もそのうちの一人だ。そんな絶景の高根ヶ原を抜けるとまた曇りはじめ忠別沼につく頃には完全に太陽が見えなかった。また、植生も腰くらいの高さの草が増え場所によっては背丈ほどある笹もあった。夏ということもあり葉が生い茂り書き分けながらすすんだ。種田山頭火の詠んだ『分け入ったも分け入っても青い山』という俳句が脳裏をよぎり一人で笑っていたが先頭だったおかげで誰にも笑っているところを見られなくてよかった。そうこうして歩いているとところどころにクマのフンが落ちており身近に危険があることを感じた。忠別岳につく頃にはすっかりガスも出て強風の中であった。そんな中でも忠別岳山頂いつも通り元気な仲間を見てそのタフさに感服した。それでも忠別岳山頂は風が強すぎたため昼休み予定の忠別岳避難小屋まで足取りを急いだ。しかし、僕らの中では避難小屋なんてちょっと歩いたらつくものだと思っていたら一時間も歩いて未だ着かず見えず地図とGPSで確認すると小屋だけ道から外れており相当下らないといけないということがわかった。そこで小屋に続く分岐まで行きそこで昼をとることにした。川嶋と島田はコーヒーを引き浅川と僕で飯を作った。暖かい飯と飲み物で体を休めて片付けをしていたら突然の大雨が降り始め、急いでかたづけをして雨具を着用した。この大雨は朝よりもひどく、痛いと感じるレベルだった。今思い返してもほんとに痛かつ

た。大雨の中歩いていると雷の音も聞こえ始め背を低くしてなるべく素早く移動した。また、視界も悪かったため常にコンパスと地図とGPSと格闘していた。ここにきてやっと隊列の中から弱音らしきものが聞こえてきたが振り返ると皆まっすぐとしたまなざしをしており心強く感じた。がれ場のような道や背丈まである藪の中を何度も進んでいるうちに下り基調の道になり遠くには氷瀑が見えヒサゴ沼が近づいてきたことがわかった。気温自体は10度ほどあり前情報よりは全然暖かかったのにもかかわらず氷瀑もとても大きく不思議な気持ちになった。そこから下っていくうちにヒサゴ沼が見えた。道中、地元山岳会の方々に道を譲ってもらいそれがこの日唯一あった人々であった。ヒサゴ沼を遠目で観測しながら2時間ほど歩くとやっと湖畔に到着しまもなくヒサゴ沼避難小屋に到着した。濡れたものを干していると先程道を譲ってくれた山岳会の方々も到着して氷瀑についていろいろ教えていただいた。どうやらヒサゴ沼の水場は氷瀑の雪解け水の為エキノコックスの心配がなくそのままの飲めるそうだ。ヒサゴの水はこの登山の中で個人的に一番おいしかった。この日は15kmほどの行程であったうえ大雨ということもあり皆少し顔に疲れが出ていた。

3日目9月13日（ヒサゴ沼避難小屋発旭岳ビジターセンター）

最終日にしてこの日が一番格過酷であった。起床と同時に大雨であったうえ昨日からの大雨のせいか道がすべて川のようになっておりひざ下まで水が深いところも至る所があった。昨日通った道を進み化雲岳のほうへ進むと寒さと雨がで皆黙りこくっていた。化雲岳山頂でも珍しく誰もしゃべらず集合写真の顔も引きつっていた。ここからの格過酷すぎた。地元山岳会の方々も非常に退屈な道だよと言っていたがその通りでしかなかった。ずっと藪の中で景色は見えない上に足元は雨のせいで川のようになっていた。そのうえ道中登山道が流され3メートルないくらいの崖になっており沢下りのような道をずっとすすんだ。また、ところどころにあった木道もコケのせいで非常に滑りやすくなり川嶋が何度コケており気が気でなかった。皆、疲れをしっかりと感じる足取りで、いつも以上に状況把握に気を使った。ここまでずっと高木やシダなどアルプスにみられる『山道』を全く見ていなかったのが突然雰囲気が変わり、南アルプスのような山道に変わっていた。体中が雨と汗で濡れており皆さすがに疲れたのか静かになっていたがそれでもすべての行程をほぼ時間通りに行動できあと少しラストスパートというところまで来たので気を引き締めた。ラスト3kmほどになると急に天気が晴れだし気温もぐんぐんと上がってきた。少し暑く蒸し暑いと感じる中、天人峡温泉に到着した。天人峡温泉への到着はとてもあっけなくいきなり車道が出てきて登山道が終わっていた。皆到着すると座り込み着替えなどをはじめつつ旭岳ビジターセンターまでのタクシーを待っていた。すでにこの日16kmほど歩いており三日間で45kmほど歩いた我々はここにきてドッと疲れがわいてきた。一時間ほど待っているとタクシーがやってきて車がある旭岳ビジターに向かった。かれこれ40分ほど乗っていたはずだったが旭岳ビジターセンターまでは一瞬に感じた。

これにて我々三日間の大雪山行は終了という形になり旭川市街のホテルに泊まり地元の

ジンギスカン屋で打ち上げをした。久しぶりに味の濃い肉を食べたためはじめは皆箸が進んでいたがしばらくするとすぐにおなかがいっぱいになってしまった。なにはともあれ、我々の合宿はあとは帰るのみとなり少々望郷の念にも駆られたが、名残惜しい気持ちもいっぱいであった。そんなことを考えつつ久しぶりの風呂に入りサウナに入りベッドにはいった。

#### 4日目（旭川市街発新千歳空港着）

この日は専ら車移動ばかりの日であったため、書くことは少ない。川嶋は念願のフェリーに乗るため途中で下車し、飛行機の予約が早めであった浅川も先に解散した。あいにくの雨だったので残された島田と僕も空港内で過ごすことにして店やレストランを回って観光していた。そうこう数時間、時間をつぶしているうちに島田も予約した飛行機の時間になりともに保安検査場を通り見送った。こうして北海道の地には僕だけとなったわけだが、どんどん埋まっていく予約リストを見て今日帰れるか心配になりながら搭乗口前にたっていた。結局僕が乗った便はANAの最終便であり羽田には24時ほどについた。川嶋のフェリーも少々トラブルがありながらも無事出航した一報を受けた。これでようやく一休みできると考えながらマイカーで家路についた。両親には土産話をたくさん持って言ったつもりだったが僕の眠気が勝ってしまい多く話すことはなく寝てしまった。

#### 後日談

今回の合宿はとても人数が少なく同期しかいないという状況であったため、計画当初からこれでいいのかという疑問が多く残っていた。夏休みずっと実家に帰る者など少々仕方がないとおもいつつも惜しさも多く感じた。過酷な登山であり基本的に豪雨だったがそれでも北海道の大地を感じて壮大な風景もたくさん見られたので最高の登山であった。そんなことを考えつつ装備の点検や洗濯をしていると我が家に小さな段ボールが届いた。恐る恐る開けると雨と登山でボロボロになった熊スプレーが一個はいついた。そう、飛行機で持ち込めない荷物を川嶋に預けるつもりがそれをすべて預け忘れ新千歳空港にて宅配便で配達を頼んだのだ。ふと熊スプレーを手に取りまじまじと眺めていると。新品で買ったはずのものなのに傷だらけで合宿の過酷さを物語っていた。食糧や行動食も計画通りに消費できたため予備のもののみとなっていた。

ここまで計画通りになる計画書をたたき出してくれた川嶋をはじめ今回の大雪合宿に携わり手厚いサポートをしてくださった西岡監督、石楠花会の皆さま、そして現役部員の仲間たちには感謝の心でいっぱいです。最後になりましたが最高の体験をありがとうございます。